

# 2016スコットランド リンクワーカープログラム 視察研修報告書

Report on “Link Workers Programme in Scotland (2016)”

八 卷 貴 穂<sup>1)</sup>  
Takaho YAMAKI

小 田 史 郎<sup>1)</sup>  
Shiro ODA

## I はじめに

2016年3月21日から3月27日にかけて開催された「2016スコットランドリンクワーカープログラム視察研修～認知症の早期支援プログラム～」に参加したので、以下に報告を行う。

本研修会は認知症予防研究の第一人者、鳥取大学医学部の浦上克哉先生を団長に、医師や作業療法士、ケアマネージャー、保健師、高齢者施設職員など認知症と関わる多くの専門職の参加があり、認知症の早期支援やリンクワーカーの活動に対する多くの関心と期待が感じられた。研修会場となったグラスゴー大学は、1451年設立の大学で、グラスゴー市内



写真1. グラスゴー大学

の高台にあり、ゴシック様式の美しい校舎が歴史を感じさせた。(写真1)

研修のプログラムは2日半の研修と、3日目の半日は施設見学という構成であった。

## II 研修報告

スコットランドでは認知症のある人は約86,000人と推計されており、今後の20年で約2倍になると予測されている。認知症のある人の60%以上が自宅で生活しており、地方都市で生活している人の多いスコットランドで、どのようにサービスを提供するかが大きな課題のひとつである。そこで現在、ソーシャルケアとヘルスケアを一本化し、認知症のある人を早期に発見・診断し、診断後には認知症のある人自身との協働でサービスを組み立てる、ひとりひとりの能力に焦点をあてたチームケアというスコットランド独自の認知症ケアシステムの構築を目指しているところである。

### 1. 早期診断

早期診断のシステムを確立するために、スコットランドではまず認知症に対するステイ

---

1) 北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科

グマをなくすべく、認知症の理解を促進する取り組みを行った。

また、診断後の支援が充実したことにより、初めに認知症と診断するかかりつけ医が積極的に診断することができるようになったという。かかりつけ医に認知症と診断された場合は認知症専門医を紹介され診断を受けることになる。

## 2. 診断後支援

認知症と診断された後にはリンクワーカーによる診断後支援が行われる。リンクワーカーについては後述するとして、この診断後支援は、認知症と診断された後2週間以内に最初のコンタクトが行われる。この2週間という時期は、認知症と診断され混乱が落ち着いた頃、という時期であり、もしこれよりもコンタクトが遅れると、落ち込んで閉じこもってしまうなどの可能性が予測されるからとのことである。この診断後の支援では支援開始時期が非常に重要なポイントになってくると考えられている。

この診断後支援の目的は、認知症のある人が今後の、あるいは将来の生活設計を自ら考えることができるように支援を行うことである。認知症のある人はいずれさまざまな自己管理が困難となる時が来る。その時に向けての支援である。その目指すところは認知症と診断されたとしても「よく生きる」、認知症が進行して自身の生活管理が難しくなっても「支援を受けながらよく生きる」、そして終末期には「よい死を迎える」であるという。

認知症と診断された人が、自身の今後の生活についてプランを立てるためには、できるだけ本人に判断力がある時期に行うことが必

要となってくる。そのためには認知症の早期診断が重要となるのである。

また、この診断後支援は認知症のある人だけでなく、家族に対しても支援が行われる。

## 3. リンクワーカー (Link worker)

これらの認知症のある人への診断後支援はリンクワーカーによって行われる。リンクワーカーの役割は「認知症の人が自分の足で歩いていけるように」支援することである。

リンクワーカーになるためには、リンクワーカー制度の運営機関であるアルツハイマースコットランドが行っている講座を受講し、修了後に面接による試験が行われるとのことであった。この講座はe-ラーニングで受講することができ、受講期間中は受講者がコントロールすることができる。受講費用は無料である。講座は認知症のある人を中心に支援を考えること、認知症のある人との良好なコミュニケーション方法を学ぶなどが主な内容となっているようだ。

リンクワーカーに必要なのは、ソーシャルワーカーや看護師と同様な知識と認知症のある人ひとりひとりに合わせた柔軟な対応ができるスキルであり、リンクワーカーは認知症のある人にとっての道しるべとしての役割があるという。

リンクワーカーの支援は、認知症と診断を受けた人の自宅を訪問し行われる。この訪問は認知症のある人ひとりひとりのニーズに合わせて行われるため、訪問回数や頻度にルールはなく、定期的な訪問ということではない。この訪問でリンクワーカーはまず認知症のある人本人が認知症という疾病をどう理解し、

認知症と診断されたことをどのような受け止められているかを確認する。診断直後は自身が認知症であるということを受け止めきれない人もいるが、1年間の関わりの中で受容ができるようになる人もいるとのことであった。この認知症であることを受容するという過程は、リンクワーカーが支援を行う上でとても重要で、本人が認知症を受け入れていないと、さまざまな社会資源を活用しての生活ができないからとのことであった。

次にリンクワーカーはコミュニケーションにより認知症のある人との良い関係性を構築するように努める。何度か訪問し話をすることでだんだんと本人の思いがわかるようになり、本人にとって何が必要なのかがわかるようになるという。その上で「どのように生きたいか」を話し合いそのための計画を認知症のある人本人と検討する。この際リンクワーカーは、「本人が現在行っていることは継続して行う」ことを大切にし、本人の興味、関心を聞くことから始めるという。

また将来、認知症状が進行した際に、どのような支援を受けながら「よく生きる」かについても話し合いが行われる。社会資源の活用についてもその検討には含まれるが、この時リンクワーカーは社会資源を「その人が生活する地域でその方に影響を与えるものすべて」と考える。つまりそれは認知症のある人に対するサービスのみではなく、また認知症の人のための特別な何かでもなく、誰でもが使用する資源を提示するようにしているという話が印象に残った。

そしてリンクワーカーの支援の次のステップが、認知症のある人と各社会資源とを繋ぐことである。公的なあるいは私的なサービス

を本人と話し合っって作り上げた計画に沿って、パッケージで示し活用できるようにするとのことであった。

繰り返しになるが、リンクワーカーの役割は認知症のある人が自分の生活を自分自身で管理できるように手伝えることであるが、もうひとつの大切な役割として、家族に対する支援がある。家族に対する認知症についての教育の一環として、認知症に関する小冊子を渡したり、アルツハイマースコットランドで行う家族向けの講座の受講を勧めるなどの支援を行うとのことであった。

以上のように、スコットランドの認知症のある人に対する支援では、リンクワーカーがその中心的な役割を担っている。

#### 4. James McKillop and Mrs McKillop

今回の研修では専門家による講義のみでなく、認知症のある人本人とその妻のお話を聞く機会もあった。(写真2)



写真2. James McKillop and Mrs McKillop

James氏は血管性認知症と診断され、現在はスコットランドの認知症ワーキンググループのメンバーとして活躍されている。

ご夫妻の話は認知症の診断を受けるまでの

経緯と、認知症の診断後のさまざまな葛藤、そして認知症であることを肯定的に受け入れることができるきっかけともなった認知症ワーキンググループでの活動についてなどであった。

認知症ワーキンググループはいわゆる当事者団体であり、「何事も私たちがなしで私たちのことを決めないで！」をスローガンに活動しているという。活動内容は政府や自治体への支援等の要望や、メディアに対する認知症についてのネガティブなイメージの表現への検討要請などである。

ワーキンググループは組織的にかつ民主的に運営が行われているといい、100名以上の参加があり、認知症の進行状況に関係なく入会が可能とのことであった。ワーキンググループ内では委員会活動なども行われていて、すべての活動の主体は認知症のある人であり、移動や書類作成などの手助けを受けながら活動しているとのことであった。

James氏は2015年11月に来日し、日本の認知症のある人と交流した経験があり、その時の感想として「日本には各種社会資源があるので、それをどう連携させるかが課題」であり、「認知症当事者が一歩前に出ることが大切」と話してくれた。

ご夫妻の講話の中で、James氏の「メディアには（認知症に対して）希望が持てるような報道をして欲しい」という言葉と、妻の「夫が認知症であるということは生きることを学ぶこと」という言葉が心に残った。

## 5. Croftspar Housing と Loretto Housing

研修最終日には認知症のある人が生活するふたつの住宅を訪問する機会があった。

最初に訪問したCroftspar Housingは、認知症のある人の地域生活のための住宅として2004年につくられた。自治体と住宅会社、アルツハイマースコットランドの共同で運営されている。生活している方は56歳から90歳代の方までと幅広いのが特徴である。

24時間スタッフが常駐していて、ここで生活されている方は必要に応じた支援を受けながら生活している。(写真3)



写真3. Croftspar Housing

住宅は敷地の入り口にスタッフ用の建物があり、その奥に中庭を囲むように戸建ての住宅が10戸ほど配置されている。外出は自由で、若い世代の方は施設外に買物などに出かけることもあるという。常駐しているスタッフは昼間は2名、夜間は1名であり、ターミナルケアまでの対応を行うとのことであった。

私たちが訪問した時に、説明をこのスタッフ用の建物で受けたのだが、ここで生活している人からのコールがとても頻回に鳴っていたのが印象に残った。

次に訪ねたLoretto Housingは、主にアルコールによる脳障害者のための施設で、地域生活に向けての中間施設としての役割を果たしている。建物は認知症にやさしい街づくり

のスタンダードに基づいて建築されているといい、直接部屋にアクセスすることができる、見当識を活用できるような工夫（各部屋から中庭が見渡せ、植物などで季節を知るなど）、バリアフリー設計などがそれにあたる。（写真4）



写真4. Loretto Housing

ここでは「できるだけ自由に自立して」生活できることを目指しており、心身両面のケアに対応できるスタッフが「肯定的で敬意ある関係性」を基盤に支援を行なっているという。

建物のロビーはとても明るく開放的で、壁にはそこで生活している方たちのアート作品などが飾られており、美術館のような雰囲気であった。しかし生活スペースには入浴用リフトなど福祉用具の設置もあり、身体状況に応じた支援が行われていることが理解できた。（写真5）

## 6. その他

最後に本研修で特に印象に残ったことをふたつ報告したい。

ひとつ目は、最初にも述べたがスコットランドで行った認知症に対する啓発活動についてである。認知症に対するスティグマをなく



写真5. 入浴用リフト

すために認知症への理解を促進する方法として、写真6のコースターが活用されたという。このコースターは主にパブで使用されたとのことで、パブ文化が根付いているスコットランドならではのユニークな取り組みであると大変興味深く感じた。（写真6）



写真6. パブで使用されたコースター

ふたつ目は、認知症のある人に対するITを活用した支援についてである。研修当時に1年間のモデルケースとしてiPadを活用した取り組みが行われていた。リンクワーカー10名、認知症のある人45名、ケアホームに5台とiPadを貸し出し活用していた。

iPadの利点として、画面が大きくて幅広い年代に使いやすいこと、リマインダーやメモ機能が付いていること、また写真を撮るこ

とができるなどの機能に注目してのことらしく、このiPadを認知症のある人とリンクワーカーとのコミュニケーションツールとして、また将来の計画を立てる際の情報検索や立てた計画を確認することなどに活用されているとのことであった。(写真7)



写真7. iPadを活用

日本でも利用者の情報共有や支援記録のためにタブレットを活用している介護施設などはあるが、認知症のある人自身がiPadのリマインダーやメモ機能、あるいは写真を撮るなどの機能を活用し認知症の物忘れによって生じる生活上のさまざまな困難を解決することが可能になるという点が非常に興味深かった。

しかし試行の中で、個人情報保護などのセキュリティの課題などがあがってきているという。またもちろん認知症の進行状況により全ての人がこれらの機器を上手に使いこなせるわけではないということも課題とされていた。今後、認知症のある人ばかりでなく誰にでも使いやすいようにさらに進化することを期待したい。

### Ⅲ おわりに

2012年に厚生労働省認知症施策検討プロジ

ェクトチームが、認知症施策の今後の方向性として、認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で生活を続けられるために、認知症のある人や家族に早期に関わる「認知症初期集中支援チーム」の設置を提案した。これを受け2018年度までには全国のすべての市町村に普及するという目標が定められたところである。

この認知症初期集中支援チームは、認知症のある人に対して、できるだけ早い段階での診断と診断後の支援を行い、本人の視点に立った支援体制を構築することを目的とした他職種協働チームである。認知症のある人に対する早期診断、早期支援の必要性がわが国でも確認され、現在動き出したところである。

今回の研修を通して、リンクワーカープログラムでの、認知症のある人本人が「どうよく生きたいか」をリンクワーカーの手助けを受けながら自ら計画するという、日本の認知症施策にはまだ十分でない、セルフマネジメントの考え方と手法を学ぶことができた。

我が国の「認知症初期集中支援チーム」の今後の動向に注目するとともに、認知症のある人がより本人の意思が尊重され自立した生活を送ることができるよう望む。

### 参考文献

- 1) 2016スコットランドリンクワーカープログラム視察研修資料(2016)
- 2) 厚生労働省「認知症施策の推進」[www.mhlw.go.jp/.../0000136024.pdf](http://www.mhlw.go.jp/.../0000136024.pdf) (2016)
- 3) 栗田主一『認知症初期集中支援チーム実践テキストブック』中央法規出版(2015)